

いのだ。自分の心を自分でどうすることもできないのだから」僧は落胆しました。
すると別の想念がムラムラと起きてきたのです。
「初禅の悟りさえ得ていらない私なのだ。それならまだ一般人と変わらないではないか、それならそれで欲望のままに行動して何が悪い……
ままよ、すべての戒律を打ち捨てて、この娘と一緒に思いのこすことのないほど楽しみ抜いてやろうか」
そう思つて娘の肩を抱き締めようとしたとき。
「待ちなさい！」突然、師の優婆塞多尊者が目の前に姿を現



そこで尊者は悟りを得た後に、人間の感覚の対象となつて煩惱を起こさせるものを不淨なもの汚れたものと觀ずる方法を教えました。これを「不淨觀」といって、釈尊も一般の民衆にこれを教えられたことがあります。



一済は力いなる功徳を成した。肉体の束縛から脱し切れぬ一人の比丘を、汝の強い心とその手とでその比丘を解脱せしめた。

穏やかな境涯に入ろうとして、なかなか入れないでいるひとりの比丘を、汝の強い心と手は、苦痛もなく涅槃の境に入れてやつたのだ。汝の行いは讃うべき大功德である】

それは外道魔神の誘惑だつたのですが、クツ比丘はこれを天來の声と錯覚してしまい、自分のこのようないに確信をもつようになつてしまひました。確信が自信に変わり、その太刀をひつきげて大衆の宿舎に帰り、大きい声をあげて叫んだものです。



わされました。僧は驚きのあまり卒倒しそうになりながら、膝をつき深く頭を垂れました。

「分かつただろうな、お前はそれでも向上の必要がないほど究極の悟りを得たというのか」

うのぼれていた彼の本当の修行は、このときから始まったのです。

この經の第一巻には
次のようなおもしろい
話があります。
釈尊が跋耆^{ばき}、跋渠末^{ばつこまつ}
江のほとりに滯在され
たときのことです。釈
尊はこの時、不淨觀を
力説されたので、大衆
(修行僧団)は深く不
淨觀に浸つて煩惱を静
めました。

らされて、ただの白骨になつて転がる。エネルギーがしたたる筋骨たくましい男も然り、比丘らはこのように思つて肉体への執着から脱しようとしたのです。

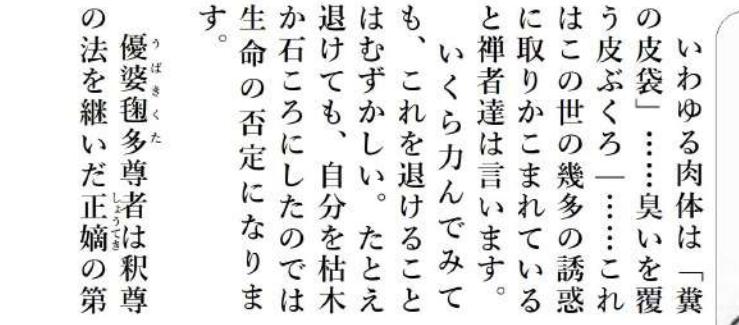
大衆のうちの一人の比丘（修行僧）は不淨觀を実習するうちに、わが肉体を嫌惡して早くこの不淨な肉本を離れたいと願つたのです。そこで彼は座を立つてクツという名前の比丘のところへ行つて、

「どうか私のこの肉体を減ぼして欲しい。あなたはもとは獵師だつたそうじゃないか。私を殺すことなんかわけないはずだ。そのお礼

として私の法衣はみんなあなたにあげるから」それを聞いたクツ比丘は直ぐにその願いを受け入れたのです。太刀を振つてその男を殺し、血糊の付いた太刀をひつきげて跋渠末江へ向かいました。血糊を川の水で洗つていると、水面にぽつかり不思議な神さまのような姿が浮かび上がり、そして彼を讃えたのです。

「汝は大いなる功德を成した。肉体の束縛から脱し切れぬ一人の比丘を、汝の強い心とその手とでその比丘を解脱せしめた。

穏やかな境涯に入ろうとして、なかなか入らないでいるひとり



四祖といわれていま
す、漢字だといろいろい
り、優波笈多と書い
た経典もあります。第
三祖、商那和修尊者の
弟子で、阿育王のため
に法を説き、王をして
八万四千の塔を建てさ
せた人として知られて
います。

うとはしなかつたのです。そこで師の優婆鞠多尊者はしばしば論されただけれども、彼は一向に本氣で向上しようという気をおこさなかつたのです。

『阿育王伝』による

と、尊者はそれを大へん心配されてついに方便をめぐらし、彼に中印度に行くようになると命じられました。旅の途中、深い山中にさしかかると、尊者は神通力をもつて五百の賊が五百の商人を殺す現場

に達したのなら恐怖から自由でなければならぬ。さては私はまだ次の位、第三禅ぐらいのところかしらん。
彼はわが身の拙さを嘆きながら歩いて行くと、先ほど山中で殺された商人の娘が、かろうじて難を逃れて一人で憔悴した姿で歩いて来ました。



Upagupta

優婆鞠多(うばきくた)【不詳】第四祖。紀元前三世紀頃の僧で、中印度
箠羅の商人鞠多の第三子として生まれた。智慧と弁才は釈尊に等しいとされ
る。阿難陀の弟子、商那和修は優婆鞠多の能力を見初め出家させようと説法指
導した。

優婆鞠多は一十歳で出家得度し、さらに阿育王を教化し仏教興隆を大いに助けた。
また彼は阿育王の王師となり、阿育王を教化し仏教興隆を大いに助けた。

仏(ぶつ)顔のない仏と称せ
られています。

この偉大な尊者の門
下に、修行中の一人の
弟子がいました。彼は
まだ究極の悟りを得て
いないのに、自分はも
う究極の位に達したの
だと思いこんでそれ以
上、向上の道を求めよ

欲望を統御するなり
流れに従つて されど 流れに委さず

初禪 諸欲・諸不善（すなわち欲界）を離れ、尋伺を伴いながらも、離による喜・楽と共にある状態。**尋伺** 注意を対象に向けること（尋）と、それを調査すること（伺）

第二禅 -尋伺が止み、内清浄による喜・楽と共にある状態。

第三禪 - 喜を捨て、正念・正見を得ながら、
迷と共にある状態

第四禪 - 楽が止み、一切の受が捨てられた
不苦不樂の状態

- 空無辯處 - 無限の空の領域
- 識無辯處 - 無限の識の領域
- 無所有處 - 有る所が無い領域
- 非想非非想處 - 想が非ず 非想にも非ずの
領域

想受滅 - 表象も感受も消滅する境地。

として私の法衣はみんなあなたにあげるから」

それを聞いたクツ比丘は直ぐにその願いを受け入れたのです。太刀を振つてその男を殺し、血糊の付いた太刀をひつさげて跋渠末江へ向かいました。血糊を川の水で洗つていると、水面にぽつかり不思議な神さまのような姿が浮かび上がり、そして彼を讃えたのです。

「クツ比丘よ、早く私の肉体を始末してくれ。お礼に私の法衣をみな君にあげる」

すると不淨觀を説かれる积尊の真意を理解せず、ただ肉体の不淨觀に捉われてしまつた連中が次々に手を上げたのです。

すると太刀の切れ味を信頼してこい。みんな、おれは出てこい。静寂の涅槃に入りたいものは出でてよい。みんな、おれの太刀の切れ味を信頼しろ。痛みなく涅槃に送つてやるぞ」

結局、六十人の比丘達がクツ比丘の太刀の露と消えてしまったのです。

やがて、釈尊説法の日が来ました。大衆が各々の席について釈尊の登壇を待ちました。

やがて時到り釈尊は高座に座つてまわりを見渡され、不審そうに侍者の阿難に向つて、「そこここに空席がぽつかりとある。あれはどうしたのか」と尋ねられました。そこで阿

「お坊さま、あなたは私の命の恩人です、ありがとうございます」「娘は心をこめて何度もお礼を言いました。そのしおらしい姿を見るにつけ、僧の愛欲の炎は再び燃えあがつてしまっています。

わしました。様子を見ながら僧は川下を渡り、彼女は川上を渡りはじめたのです。

「助けて！助けて！」

という声が聞こえました。

驚いて川上を見る

と、娘は溺れて、浮き

つ沈みつつしながら川

面を流されてきます。

僧は口のなかでつぶや

きました。

「女人、水火の難に遇

うとき、これを救うは

仏も許すところ也」

このように唱えつつ

彼は娘を抱きあげまし

た。すると娘のやわら

かな肌がふれて、愛欲

のこころが体内に燃え

あがつたのです。

「ああ、私はまだ第三

禪すら得てはいない。

得ているなら、煩惱か

ら自由でなければなら

ないはずなのに……」

僧はわが身の拙さを



桃源院縁起

桃源院の歴史を探訪 役員研修旅行

一〇二三年八月二十九日

一九三三年八月二十九日三十日

鬼庭左月は源平時代の勇士、斎藤別当実盛の末裔で伊達晴宗、輝宗、独眼竜政宗の三代に股肱の家臣として仕えた評定衆の筆頭で有ります。名は良直、通称周防、左月斎はその号です。

桃源院は天文十三年（一五四四）左月斎良直公により現在地に創建され、山号を和合山（のち和光山）と称し、開山は梓山松林寺三世一華宗甫大和尚であります。その後独眼竜政宗が、仙台に移封されるとともに、桃源院も宮城県志田郡松山町千石本丸（現在、宮城県大崎市松山千石本丸）に移ることになりました。川井村桃源院は、当地に残つた人達によつて再興されたもので、曹洞宗寺院の命脈である法系は、瞬時も絶えることなく、聯綿として引き継がれています。

当院に於ては、左月斎の法名自光院殿剣外參心大居士の尊靈を祠り報恩供養を日々怠りなく修するよう口伝されています。

難はクツ比丘のことを報告しました。このとき以来、釈尊は不淨觀息觀」を説き、みずから命を断つことも、人の手を借りて命を断つことも、嚴重に禁止されたのです。

しかし、愛欲の世界を解脱してすこしも心を動かなくなるというのは、どういうことなのでしょうか。肉体が、すなわち自分が石ころや枯木のようになることでしょうか。もしそうだとすれば、その一番手近な道はやはりみずからいのちを断つか、または人の手を借りていのちを悪の泥沼に落ち込む話でした。

月は流れました。そこで婆さんはもうそろそろ彼の悟りも完成に近づいた頃だろうと思つて、彼の悟りの境地を実地に試してみるとしたのです。

婆さんは自分の娘を草庵に呼びよせ、ことの成り行きを説明して、ドッキリを演じさせることにしました。

娘は若いやわらかな体をくねらせて、坐禅に没頭している修行僧にしなだれかかり、甘い言葉で言い寄ったの

意は何か、一女を抱かないのも不可、抱くのも不可。あなたならこのときどうするか」というのがこの「婆子焼庵」の公案の求めていいるところです。

A photograph of a traditional Japanese thatched-roof house (fukinuki yatai) with a dark wooden frame and a steep, thick thatched roof. The house is nestled among various plants, including tall grasses and leafy bushes in the foreground. The background shows more trees under a clear sky. The image has a red border.

断つことになります。石ころや枯木になることは、生きながら死んだ状態になることで、つまり冬眠状態になることなのです。もしそれが涅槃ということなら、涅槃とは要するに生命の営みの否定でなければならないはずです。

です。しかし、さすがです修行僧は静かに座つたままで微動だにせず、その威儀をくずしませんでした。

「枯木寒巖に倚る、とうこくさんがんによる冬暖氣無し（枯木が凍りついた岩により添つたようなものだ。真冬の最中に暖気などあるわけがないようだ。私には色気など全くない）」と、娘を拒絶します。

それを聞いた老婆は、「なんということだ。私ともあろうものがそのような者に十数年もの間供養をしてきたのか！」と腹を立て、その修行者を追い出すとともに彼の修行のための草庵も焼き払つてしまひます。

かしい行動に出た
は、電気なら放電
す。修行者がそれに
じたら感電で、破戒
(戒めを破ること、
に、僧が戒律を破る
と)として感電死し
しまうでしょう。修
者が「さんとう木寒巖に
る、さんとう冬暖氣無し」
微動だにしないのは
「わたしは、電気が
わらない絶縁体だ」
宣言したようなもの
す。感電しないのは
構ですが、私たちは
きているのですから
縁体では困ります。
欲にビリビリと感電
てもいけない。さら
感電しないゴムやブ
スチックのような絶
体では人間ではあり
せん。「さあ、あな

がたならどうなさ
か、承りましょ
うと、聴講者に問
い返
たのです。

て人情の通じない絶縁体のゴム人間になつたら人間失格です。

さて現代ならばここに……半導体という觀念を導入できるのかも知れません。これはみなさんにお考へいただくとしまして、このよううにこの公案は、老婆と娘と修行僧とを登場させ、小乗とは違つた大乗仏教の思想を語らせているのです。

眞実の修行とは人間の本能を断ち切ることでなく、本能を統御することです。かの老婆は、その境地を修行者が得たであろうと期待したのですが、老婆の期待に反した修行者は、素朴な本能抑圧の

